

研究課題名：ワンヘルスに基づく食品由来薬剤耐性菌のサーベイランス体制の強化ための研究

分担課題名：Food Chain における薬剤耐性菌の実態調査及び分布要因の解析

研究分担者：浅井鉄夫 岐阜大学大学院連合獣医学研究科・教授

研究協力者：杉山美千代（岐阜大学大学院連合獣医学研究科）

佐々木貴正（国立医薬品食品衛生研究所）

岩田 康一（名古屋市食肉衛生検査所）

大野 眞史（岐阜市食肉衛生検査所）

研究要旨

フードチェーンにおける薬剤耐性菌の制御は人の健康に影響する重要な課題で、その実態把握は対策を構築する上で不可欠な情報である。以前より鶏肉における ESBL 産生菌の汚染は注目されてきたが、国内の関東以北で生産された豚に家畜関連黄色ブドウ球菌（LA-MRSA）が分布することが明らかにされ、豚肉における LA-MRSA の汚染が懸念されるようになった。本研究では、鶏肉の ESBL 産生大腸菌の汚染に季節変動が認められるのか、関東以西で生産される豚における LA-MRSA の汚染実態を把握することを目的に検討した。東海地方で生産された豚から LA-MRSA を含む MRSA が分離され、また、国産豚肉が LA-MRSA に汚染されていることを明らかにした。今後、調査範囲を広げて実態を明らかにしていく。また、鶏肉における ESBL 産生大腸菌の汚染に季節変動があるかを継続的に調査して明らかにしていく予定である。その他、国産肥育牛におけるカンピロバクター汚染実態と食肉由来コリスチン自然耐性菌における第3世代セファロスポリン耐性についてβ-ラクタマーゼ遺伝子を同定した。

A. 研究目的

食品を介して人へ伝播する薬剤耐性菌の対策は、フードチェーンにおける汚染実態に基づき構築すべき喫緊の課題である。畜産現場における抗菌薬治療は、細菌感染症を制御し、安全な畜産物を安定供給するための必要な資材であるが、畜産物における薬剤耐性菌汚染が増大する危険性がある。食肉処理施設へ出荷される家畜に対し抗菌性物質の使用禁止期間（休薬期間）が設定されているため、抗菌薬による選択圧は低下していると考えられている。また、食肉処理施設において家畜の腸管内の細菌による汚染が一定の頻度で生じるが、腸管内細菌数に対す

る薬剤耐性菌比率が低ければ耐性菌による汚染確率は低下する。

これまでの研究により、肉用鶏生産農場において第三世代セファロスポリン耐性大腸菌が分離されるものの、その存在比率は低い（1%未満）ことを明らかにした（Suzuki et al., 2019）。また、肉用鶏の飼育期間中に薬剤耐性プラスミドが菌種間伝播することやプラスミドの残存に抗菌薬の使用の影響を受けることを明らかにしてきた（Yossapol et al, 2020）。しかし、別の研究テーマで食鳥処理場の汚水を検査する過程で、ESBL 産生大腸菌の割合が大きく変動する可能性が示唆された。そこで、市販肉における ESBL

産生大腸菌の汚染菌量の季節変動性について調査する。

2018～2020年に本事業で実施した研究で、東北地方と関東の食肉処理場で得た豚のサンプルの10%から家畜関連黄色ブドウ球菌(Livestock-associated MRSA, LA-MRSA)が分離されることを明らかにした。また、枝肉へのMRSAの伝播頻度は低いが(Sasaki et al, 2020)、東京都の調査では国産豚肉の2%、輸入豚肉の18%からMRSAが分離されている(下島ら, 2020)。このような状況から、中部から九州にかけての食肉処理場で出荷豚におけるMRSAの分布と国産豚肉を対象とした全国規模のMRSA汚染実態調査が必要である。なお、これまで人のLA-MRSA国内感染事例は報告されていないものの、これまでの調査により国産豚のMRSA感染状況は海外と同様であると推定される。

本研究では、食肉処理施設へ搬入(出荷)された家畜が保有する薬剤耐性菌と国産食肉における薬剤耐性菌の実態を明らかにし、疫学的に解析することで対策を構築することを目的とする。2021年度から3年間でFood-chainにおける薬剤耐性菌の汚染対策を構築するため、1年目に肉用鶏及び豚における薬剤耐性菌の汚染実態調査を段階的に開始した。

B. 研究方法

(1) 市販肉におけるESBL産生大腸菌の汚染菌量の季節変動性

岐阜市内のスーパーマーケット4店舗で、月1回、輸入・国産・銘柄の鶏肉(ムネまたはモモ)を購入し、サンプルとした。薬剤(CTX 1 μ g/ml)添加ECC培地を用いてCTX耐性大腸菌数をMPN法により推定した。

(2) 国内の出荷豚におけるLA-MRSAの実態調査

2021年度は、中部地方49農場からの出荷豚245頭を調査対象として、前年度までの研究班

で検討した食肉処理施設における最適なMRSA調査プロトコルを用いた実態調査を行った。検査材料はと畜場の協力の元、耳裏(耳介の中でなく、後ろ)のスワブを滅菌綿棒またはシードスワブNo.1(栄研化学)または滅菌綿棒を用いて採取した。シードスワブの先端を切って、その先端を6.5%塩化ナトリウム加ミュラーヒントン培地(関東化学)9mLに入れて、37°Cで1日間培養した。1白金耳分の培養液をポアメディアMRSA II培地(栄研化学)に塗抹し、37°Cで48時間培養した。MRSAと思われる集落を最大2個釣菌し、PCR法で黄色ブドウ球菌の同定と*mecA*の保有を確認した。

(3) 市販豚肉におけるLA-MRSAの汚染実態調査

国内5地域(北海道・東北、関東、中部、関西、九州)のスーパーマーケットで豚肉を購入し、LA-MRSAの汚染実態調査を行った。豚肉25gをビニール袋に入れ、6.5%塩化ナトリウム加ミュラーヒントン培地(関東化学)225mLを加えて、37°Cで1日間培養した。1白金耳分の培養液をポアメディアMRSA II培地(栄研化学)に塗抹し、37°Cで48時間培養した。MRSAと思われる集落を最大2個釣菌し、PCR法で黄色ブドウ球菌の同定と*mecA*の保有を確認した。

(4) 国産肥育牛のカンピロバクター感染状況と薬剤耐性

と畜検査に合格した国産肥育牛のカンピロバクター感染状況及び分離株の薬剤耐性状況について調査を実施した。2021年3月～8月の間に1と畜場でと畜処理された国産肥育牛の164頭(15道県に所在する34農場から出荷された黒毛和種130頭、交雑種33頭及びその他和牛1頭)から直腸スワブを採取し、mCCDAを用いた直接培養法によりカンピロバクターの有無を調査した。また、各陽性個体の1菌種1株について、MLST解析により遺伝子型を同定するとともに

薬剤感受性試験（8剤：NA、CPFX、SM、EM、TC、ABPC、GM、CP）を実施した。さらに、CPFX耐性が認められた遺伝子型については、*gyrA* 遺伝子（各遺伝子型1株）の変異の有無を調査した。

（5）国産食肉から分離したコリスチン自然耐性株における第3世代セファロスポリン耐性
国産食肉310検体（鶏肉103検体、豚肉103検体、牛肉104検体）からコリスチン添加（0.1 μ g/mL）DHL寒天培地で分離されたコリスチン自然耐性菌種の396株のうち、第3世代セファロスポリン（セフォタキシムまたはセフトジジム）耐性を示した37株を対象に β ラクタマーゼ遺伝子をDallenneらのマルチプレックスPCRとTanimotoらのFONA PCRを用いてPCR法で検索した。

（倫理面への配慮）
特になし

C. 研究結果

（1）市販鶏肉におけるESBL産生大腸菌の汚染菌量の季節変動性

2021年9～12月において鶏肉からESBL産生菌は、37検体中18検体（48.6%）から分離された。国産14検体中11検体（78.6%）、銘柄12検体中5検体（41.7%）、輸入11検体中2検体（18.2%）の順であった。MPNで推定した菌数は、9月では0.3～2.6、10月では0.3～0.9、11月では0.3～6.0、12月では0.3～3.5であった（表1）。

（2）国内の出荷豚におけるLA-MRSAの実態調査

MRSAは49農場中7農場（14.2%）、245頭中19頭（7.8%）から分離された。PCRでCC398であったものは1農場由来の4株で、その他は異なるST型と考えられた（表2）。

薬剤感受性は、すべての株がMIPIC・CFXに耐性を示した他、CLDM耐性（89.5%）、TC耐性

（84.2%）、EM耐性（78.9%）、CP耐性（26.3%）、LVFX（5.3%）の順で耐性を示した。VCM、TEIC、LZDに耐性を示す株は認められなかった。PCR法でCC398であった4株は全てTC、CLDM及びCPに耐性を示した。

（3）市販豚肉におけるLA-MRSAの汚染実態調査

MRSAは209検体中9検体（4.4%）から分離され、低率ではあるが国産豚肉に分布することが示された。分離されたMRSAは全てCC398で、すべて国産肉であった。東海地区で購入した豚肉の陽性率は2.7%（4/150）、関東では9.3%（5/54）であった。

薬剤感受性は、すべての株がMIPIC、CFX及びTCに耐性を示した他、EM、CLDM、CP耐性（3薬剤ともに66.7%）、LVFX（44.4%）、GM（22.2%）の順で耐性を示した。VCM、TEIC、LZDに耐性を示す株は認められなかった。

（4）国産肥育牛のカンピロバクター感染状況と薬剤耐性

カンピロバクターは94頭（57%）から分離された。これら感染牛は29農場（85%）から出荷されていた。*C. jejuni* 68株は、22の遺伝子型に分類され、ST806（12株）、ST21（9株）、ST459（8株）の順で、ST806は8道県に所在する10農場から出荷されていた。*C. jejuni* では、TC耐性の割合が最も高く（75%）、次いでCPFX耐性（65%）であった。上位3遺伝子型の79%（23/29）はTCとCPFXの両方に耐性であった。CPFX耐性は16の遺伝子型で認められ、いずれもGyrAにアミノ酸変異（Thr86Ile）が認められた。*C. coli* 26株は2つの遺伝子型（ST1068:23株、ST827:3株）に分類され、ST1068は7県に所在する9農場から分離された。*C. coli* ではCPFX耐性の割合が最も高く（88%）、次いでTC（77%）であった。2つの遺伝子型ともにCPFX耐性が認められ、*C. jejuni* と同様のアミ

ノ酸変異 (Thr86Ile) が認められた。また、調査牛の 90%は、と畜場への出荷までに少なくとも 2 農場で飼育されていた。

(5) 国産食肉から分離したコリスチン自然耐性株における第 3 世代セファロスポリン耐性

コリスチン自然耐性菌 396 株中 37 株 (9.3%) が第 3 世代セファロスポリンに耐性を示した。第 3 世代セファロスポリン耐性 *Serratia fonticola* : 10 株中 10 株が *bla_{fonA}* を保有し、国産の鶏肉、豚肉、および牛肉で検出された。第 3 世代セファロスポリン耐性 *Hafnia alvei* 15 株中 11 株から *bla_{ACC}* が検出された。第 3 世代セファロスポリン耐性を示した *Morganella morganii* は *bla_{DHA}* (鶏肉 (1/1)) を保有していた。

D. 考察

2021 年度から 3 年間で Food-chain における薬剤耐性菌の汚染対策を構築するため、1 年目に肉用鶏及び豚における薬剤耐性菌の汚染実態調査を段階的に開始した。

(1) 国産食肉における ESBL 産生大腸菌の汚染菌量の季節変動性

2021 年の 4 か月間に鶏肉から分離された ESBL 産生菌は、国産で最も高く (78.6%)、輸入では低率 (18.2%) であった。また、MPN で推定した菌数はばらつき、一定傾向は認められていないが、年間を通じて調査することで季節変動の有無について明らかにしていきたい。

(2) 国内の出荷豚における LA-MRSA の実態調査

出荷豚における MRSA は食肉汚染の原因となるため、継続的な調査が必要となる。今回の東海地区で実施した調査では 14.2%の農場、出荷豚の 7.8%から MRSA 分離され、これまで報告した東北地区や関東に比べて低率であった。ST398 の全株がテトラサイクリン (TC) 耐性を示し、全ての株が多剤耐性株であった。今後、遺伝子レベルの解析を進めながら豚に分布する MRSA の遺伝子型、

耐性遺伝子型とヒトに由来する MRSA との関連についても検討していく予定である。

(3) 国産豚肉における LA-MRSA の汚染実態調査

低率ではあるが市販豚肉に分布する MRSA が全て ST398 であったため、前述の出荷豚に分布する MRSA の多様性と一致していない。また、東海地区で購入した豚肉の陽性率 (2.7%)、関東 (9.3%) に比べて低く、関東で購入したものはすべて国産であったことが影響した可能性も考えられる。今後、調査対象地域を増やししながら、国内の豚肉における MRSA 汚染の実態を明らかにしていく。

(4) 国産肥育牛のカンピロバクター感染状況と薬剤耐性

今回の調査で、国産肥育牛に多様な遺伝子型 (MLST 型) のカンピロバクターが分布することを明らかにした。一部の ST 型は、異なる地域の農場で認められ、広域に分布していることが示された。所在する農場は 94 頭 (57%) から分離された。今回、調査対象の牛の大部分 (90%) は、と畜場への出荷までに少なくとも 2 農場で飼育されていたことから、感染牛の農場間移動及び農場における TC 系やフルオロキノロン系抗菌薬の使用等により、耐性株が選択・拡散されていると考えられた。

(5) 国産食肉から分離したコリスチン自然耐性株における第 3 世代セファロスポリン耐性

コリスチン自然耐性を示す菌種を対象に、第 3 世代セファロスポリン耐性を調査した結果、約 10%で認められ、 β ラクターマーゼ遺伝子の保有が確認された。特に、Tanimoto らが輸入鶏肉で報告した *bla_{fonA}* は、国産の鶏肉、豚肉、および牛肉に由来する第 3 世代セファロスポリン耐性 *Serratia fonticola* で認められた。これまで、国内の家畜でマイナーな ESBL 遺伝子の調査がほとんど行われていないが、幅広い菌種を対象にして実態を明らか

にする必要がある。

E. 結論

薬剤耐性菌による食品汚染は、生産段階に分布する薬剤耐性菌に起因するため、Food Chainにおける汚染実態の把握を進めながら、問題点を明らかにしていく必要がある。

F. 健康危険情報

(分担研究報告書には記入せずに、総括研究報告書にまとめて記入)

G. 研究発表

1. 論文発表

- ① Sasaki Y, Sakurada H, Yamanaka M, Nara K, Tanaka S, Uema M, Ishii Y, Tamura Y, Asai T. Effectiveness of ear skin swabs for monitoring methicillin-resistant *Staphylococcus aureus* ST398 in pigs at abattoirs. *J Vet Med Sci.* 83(1):112-115, 2021.
- ② Matsui K, Nakazawa C, Thiri Maung Maung Khin S, Iwabuchi E, Asai T, Ishihara K. Molecular characteristics and antimicrobial resistance of *Salmonella enterica* serovar Schwarzengrund from chicken meat in Japan. *Antibiotics.* 10(11):1336, 2021.
- ③ Odoi JO, Takayanagi S, Yossapol M, Sugiyama M, Asai T. Third-generation cephalosporin resistance in intrinsic colistin-resistant *Enterobacteriales* isolated from retail meat. *Antibiotics.* 10(12):1437, 2021.
- ④ Sasaki Y, Kakizawa H, Baba Y, Ito T, Haremaki Y, Yonemichi M, Ikeda T, Kuroda M, Ohya K, Hara-Kudo Y, Asai T, Asakura H. Antimicrobial resistance in *Salmonella* isolated from food workers and chicken products in Japan. *Antibiotics.* 10(12):1541, 2021.

2. 学会発表

・学会発表、説明会等 合計 〇件 :

1) 学会発表 合計 3 件

1. 佐々木貴正、浅井鉄夫、朝倉宏. 国産肥育牛のカンピロバクター感染状況と薬剤耐性 (第 14 回日本カンピロバクター研究会総会 (2021 年 9 月 24 日、WEB 開催、国産肥育牛のカンピロバクター感染率と薬剤耐性状況について報告した。)

2. 浅井鉄夫 家畜や愛玩動物に分布する薬剤耐性菌 (第 91 回日本感染症学会西日本地方会学術集会、第 64 回日本感染症学会中日本地方会学術集会、第 69 回日本化学療法学会西日本支部総会 合同学会、令和 3 年 11 月 6 日、岐阜、家畜と愛玩動物における薬剤耐性菌の現状について概説した。)

3. 浅井鉄夫 動物分野における薬剤耐性菌の対策と課題 (第 14 回日本医師会・日本獣医師会による連携シンポジウム、令和 3 年 11 月 30 日、WEB 開催、ワンヘルスアプローチで取り組む薬剤耐性菌対策として、AMR 対策アクションプランの成果と課題について獣医学領域から概説した。)

2) 市民向け説明会 合計 0 件

なし

3) 業界関係者向け説明会

1. 浅井鉄夫 次期アクションプランの動物分野の数値目標について (「AMR 対策の数値目標を検討するラウンドテーブル」、令和 3 年 6 月 30 日、WEB 開催、AMR アライアンス・ジャパン、AMR 対策アクションプランの成果と課題について獣医学領域から概説した。)

2. 浅井鉄夫 動物分野における抗菌薬使用—現状と今後の課題 (「将来への投資~AMR から世界を救うために求められる投資家の役割~」令和 3 年 9 月 8 日、WEB 開催、AMR アライアンス・ジャパン、家畜における薬剤耐性菌と抗菌薬使用の現状について概説した。)

4) 行政関係者向け説明会

1. 浅井鉄夫 動物分野における抗菌薬の適正使用について (「次期 AMR アクションプラン策

定作業部会」における有識者ヒアリング、令和3年11月14日、WEB開催、不明、PwCコンサルティング合同会社、動物分野の抗菌剤の慎重使用に関する現状と課題を概説した。）

H. 知的財産権の出願・登録状況
(予定を含む。)

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし

表1 鶏肉におけるCTX耐性大腸菌の汚染状況

	陽性/検査 (%)			平均菌量 (/g)		
	国産	輸入	銘柄	国産	輸入	銘柄
2021/9	2/2	1/3	2/4	1.0	0.3	2.6
2021/10	3/4	0/3	2/4	0.5	0.3	0.9
2021/11	3/4	0/2	1/4	6.0	0.3	0.5
2021/12	3/4	1/3	0/4	3.5	0.5	0.3
計	11/14 (78.6)	2/11 (22.2)	5/12 (41.7)			

表2 と畜場出荷豚における耳裏からのMRSAの分離

と畜場	農家数/頭数	陽性農家数/頭数	陽性% (農家/頭数)
A	40/200	7/19	17.5/9.5
B	9/45	0/0	0/0
計	49/245	7/19	14.2/7.8

表3 と畜場および市販肉から分離したMRSAの薬剤感受性

薬剤	と畜場(n=19)		食肉由来(n=9)	
	MIC範囲	耐性株数(%)	MIC範囲	耐性株数(%)
CEZ	2-32		1-32	
FMOX	1-8		2-64<	
CMZ	4-16		4-64<	
IPM	≦0.25		≦0.25-1	
MINO	≦0.12-4		2-4	0
TC	≦0.5-64<	16(84.2)	32-64<	9(100)
VCM	0.5-1		0.5-1	0
TEIC	≦0.25		≦0.25	0
LZD	1		1-2	0
ABK	1-2		1-8<	
TZD	≦0.12-0.25		≦0.12-0.25	0
DAP	0.25-5		0.25-0.5	0
RFP	≦1		≦1	0
MPIPC	>4	19(100)	4-4<	9(100)
MUP	≦0.06		≦0.06	
EM	1-128<	15(78.9)	0.5-128<	6(66.7)
CLDM	0.25-128<	17(89.5)	0.12-128<	6(66.7)
GM	0.5-2		0.5-128<	2(22.2)
LVFX	0.12-8	1(5.26)	0.12-8<	4(44.4)
ST	≦4.75/0.25		≦4.75/0.25-19/1	0
FOM	≦0.25-2		≦0.25-16	
CFX	8-8<	19(100)	8-8<	9(100)
CP	4-64	5(26.3)	4-128	6(66.7)

CLSI ブレイクポイントあり

表4 MRSAの薬剤耐性パターン

耐性パターン	株数	
	と畜場	食肉由来
TC,MPIPC,EM,CLDM,GM,LVFX,CFX,CP	0	1*
TC,MPIPC,EM,CLDM,LVFX,CFX,CP	0	2*
TC,MPIPC,EM,CLDM,GM,CFX,CP	0	1*
TC,MPIPC,EM,CLDM,LVFX,CFX	0	1*
TC,MPIPC,EM,CLDM,CFX,CP	1	0
TC,MPIPC,EM,CLDM.CFX	11	1*
TC,MPIPC,CLDM,CFX,CP	4*	0
TC,MPIPC,CFX,CP	0	2*
MPIPC,EM,CLDM,CFX	1	0
MPIPC,EM,LVFX,CFX	1	0
TC,MPIPC,CFX	0	1*
MPIPC,EM,CFX	1	0

*:CC398

表5 市販豚肉からのMRSAの分離

購入地		検体数	陽性数	%
東海	愛知	71	2	2.8
	岐阜	79	2	2.5
関東	千葉	25	1	4.0
	神奈川	16	4	25.0
	埼玉	13	0	0
関西	京都	5	0	0
合計		209	9	4.4

表6 国内産と輸入豚肉からのMRSAの分離

購入地		検体数	陽性数	%
東海	国産	103	4	3.9
	輸入	47	0	0
	小計	150	4	2.7
関東	国産	54	5	9.3
	輸入	0	0	0
	小計	54	5	9.3
関西	国産	3	0	0
	輸入	2	0	0
	小計	5	0	0
国産計		160	9	5.6
輸入計		49	0	0

表7 肉用牛から分離されたカンピロバクター株のMLST型と薬剤耐性パターン

菌種	CC	株数	ST (株数)
<i>C. jejuni</i>	21	30	21 (9), 806 (12), 982 (3), 50, 487, 596, 656, 4526, 11029 (各1)
	22	4	1739 (2), 9078 (2)
	42	10	459 (8), 42, 6532 (各1)
	45	1	9681 (1)
	61	14	61 (7), 1244 (3), 10369 (4)
	257	1	929 (1)
	403	2	933 (2)
	未分類	6	922 (5), 3502 (1)
<i>C. coli</i>	828	26	827 (3), 1068 (23)

薬剤耐性パターン	<i>C. jejuni</i>							未分類	<i>C. coli</i>
	21	22	42	45	61	257	403		
ABPC, SM, TC, NA, CPFX	1		1						
ABPC, TC, NA, CPFX	5							1	13
TC, SM, NA, CPFX	1								
TC, CP, NA, CPFX									3
ABPC, NA, CPFX	1								1
TC, NA, CPFX	12	4	7			1		4	3
ABPC, TC	3				1				
NA, CPFX	3			1	2				3
SM, TC	1								
ABPC	1								
TC	2				7		2		1
感受性			2		4			1	2

C. jejuni CC21と*C. coli* CC828で多様な耐性型

表8 市販肉から分離されたコリスチン自然耐性株における第三世代セファロスポリン耐性

菌種	鶏肉 (n=103)	豚肉 (n=103)	牛肉 (n=104)	計
<i>Serratia liquefaciens</i>	2/63*	3/64	2/67	7/194
<i>Serratia marcescens</i>	2/11	0/6	0/8	2/25
<i>Serratia fonticola</i>	5/11	2/4	3/5	10/20
<i>Serratia plymuthica</i>	0/1	0/1		0/2
<i>Hafnia alvei</i>	1/17	8/40	6/32	15/89
<i>Proteus penneri</i>	2/11	0/2	0/1	2/14
<i>Proteus mirabilis</i>	0/6	0/1		0/7
<i>Proteus vulgaris</i>	0/1	0/1		0/2
<i>Proteus hauseri</i>	0/4	0/3		0/7
<i>Cedecea davisae</i>	0/11	0/1	0/2	0/14
<i>Morganella morganii</i>	1/7	0/2	0/1	1/10
<i>Providencia rustigianii</i>	0/12			0/12

*第3世代セファロスポリン耐性/分離陽性

βラクタマーゼ遺伝子の検出:

DallenneらのマルチプレックスPCRとTanimotoらのFONA PCRを用いた

- *Serratia fonticola*: bla_{fona} 10/10(内訳 鶏肉 (5/5), 豚肉 (2/4), 牛肉(3/3))
- *Hafnia alvei*: bla_{ACC} 11/15 (内訳 鶏肉 (1/1), 豚肉 (7/9), 牛肉(3/6))
- *Morganella morganii*: bla_{DHA} 1/1 (内訳 鶏肉 (1/1))